

日本IT書紀

128 トレンドボックス

07 明彩篇
卷之十八 周流

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二百二十八

トレンドボックス

一

一九六〇年代の後半、産業界と国民は産業復興を最優先にしたツケを払わなければならなくなった。工場が垂れ流しにした化学物質が河川や海を汚染し、自動車の排ガスが光化学スモッグを生み出した。海や川で捕った魚介類を食べ、なぜ体が痛み骨が変形するするのか。外を歩いていだけなのに、なぜ眩暈（めまい）や吐き気が起こるのか。これを人々は「公害」と呼んだ。

野放図に増やした自動車人が人を撥ね、電柱にぶつかり、自動車同士が正面から衝突した。年間に一人以上が交通事故で亡くなるようになった。小学生の低学年は目立つように、という配慮から黄色い帽子を被らされ、上級生が引率して毎朝、集団で登校するのが一般化した。

ちよつとした交差点にも信号と横断歩道ができ、広い通りを渡るために歩道橋という非文化的な鉄の浪費が行われた。結果、わたしたちは「事故」という言葉を取り違えて

使うようになった。

交通事故の多くは人災であって、偶然ではあり得ない。この当時に誕生した新語「交通戦争」が実態に近い。

教育の分野でも同じことが起こっていた。それまで「塾」といえば、社会に出たとき少しでも役に立つようという親心に共鳴したソロバン、習字、ピアノ、剣柔道、英会話などを指していた。それは江戸・文化文政以来の寺子屋の延長線上にあった、

一九六〇年代に入ると「学習塾」という新しいビジネスが誕生した。「受験戦争」という言葉が、何の疑いもなく使われ、学校教育とは別の場所で受験用の教育——受験テクニックの講習——が行われた。

政治の世界では、戦後復興の舵を取った政治家が雲上人になってふんぞり返り、首相派閥の族議員が平氏一門のごとく権勢を振るった。経済や金融、社会の政策が官僚に委ねられるようになった。

以後、これは筆者の個人的な感想だが、田中角栄を最後に、この国は自分の言葉で話ができ、手と足で行動できる政治家を持つことができなかつた。

ただ一人、美濃部亮吉という経済学者がいる。太平洋戦争の前、「天皇機関説」で物議をかました美濃部達吉の子息であって、一九〇四年東京に生まれた。東京帝国大学で

は大内兵衛に師事してマルクス経済学を学び、第二次大戦後は毎日新聞論説委員、吉田茂に請われて内閣統計委員会事務局長、行政管理庁統計基準局長などを務めた。

六七年の東京都知事選は、自民党が推す現職の東龍太郎との一騎打ちとなり、このとき社会・共産の野党連合が実現した。その推進母体となった「明るい革新都政をつくる会」が、「革新」を名乗った最初だった。「東京燃ゆ」と称された激戦を制し、以後、三期十二年の美濃部都政がスタートした。

戦後の「野党」とは、すなわち労働者に支持層を求めていた。それが、大都市に住み暮す市民の参加を得て「革新」になった。「シビル・ミニマム計画」「地方政府論」は現在も有効な施策であって、市民運動を政治力に結集した功績は、現今のNPO（非営利事業法人）の先駆として評価されていい。八〇年参院議員となり、八四年十二月没。享年八十。

世相を見る上で、しばしば歌謡曲が指標として使われる。筆者も同様の手法を採用する。だが、この時期になると広告宣伝や映画が重要な役割を担い始める。電通が作成した「消費者トレンドボックス広告景気年表」が参考になる。

一九六六年

・CMキャッチコピー 太陽に愛されよう／ファミリーカーのトヨタと呼んでください／2キロに1店ブリヂストン／早朝会議にきょうでかけます／縞は三歳トクをする／ウチのテレビにや色がない／わたしってダメね。

・テレビ番組 おはなはん／源義経／ふるさとの歌まつり／ラット・パトロール／銭形平次／バットマン／わんぱくフリッパー／若者たち／真田幸村／ザ・ガードマン／ウルトラQ／奥さまは魔女／宇宙家族ロビンソン／おそ松くん／魔法使いサリー／ハニーにおまかせ／かわいい魔女ジニー

・流行語 黒い霧／マッチ・ポンプ／核の傘／物価戦争／三食昼寝付き／生活かかっちゃってっからね／新三種の神器／世の中まちがってるよ／いろいろあらアな／びっくりしたなーもう／ダヨン／ボクアしあわせだなア。

・ベストセラー 黒い雨／沈黙／青梅雨

・歌謡曲 夢は夜開く／絶唱／霧氷／空に星があるように／赤い風船／君といつまでも／骨まで愛して／バラが咲いた／悲しい酒／星のフラメンコ／こまっちゃやうな／想い出の渚

・映画 戦争と平和／007サンダーボール作戦／メリー・ピンス

六月二十九日に初来日したビートルズは七月二日まで日本に滞在し、その間、東京・九段の日本武道館で五回の公演を行った。東京オリンピックで柔道の最終会場であり、毎年八月に戦没者慰霊式典が行われる厳肅なるべき場所で、ジャカジャカとうるさいだけのコンサートが行われることに、世間ではやや戸惑いがあった。

イギリスの港町リバプールで結成された四人組がレコードデビューを果たしたのは、六二年の十月五日だった。「ラヴ・ミー・ドウ」がそれである。

四人のメンバーはジョン・レノン (John Lennon) / リズム・ギター)、ポール・マッカートニー (Paul McCartney) / ベース)、ジョージ・ハリスン (George Harrison) / リード・ギター)、リンゴ・スター (Ringo Starr) / ドラムス)。一九七〇年に解散するまで、公式に発表された二百十曲のうち、圧倒的な数をジョンとポールが作曲した。

長髪。
— というものが、不良の徴 (しるし) とされた時代だった。

最初はエレキギターの太音響に負けじとばかり、マイクを舐めるようになりたての唄い方だったそうだが、「ミシェル」「イエスタデイ」のメロディラインの美しさが見

直された。海外の人気タレントが少し落ち目になると日本で荒稼ぎするようになった最初でもあった。

羽田空港に着いた四人は、祭り半纏を着てタラップを降りた。日本のファンに媚びていることは明らかだった。分かってはいたが、それでも何といてもビートルズだった。これをきっかけに、グループサウンズのブームが起きた。ジャッキー吉川とブルーコメッツ、ザ・スパイダース、ワイルド・ワンズなどが結成され、一方、アンチ体制派の若者は「花はどこへいった」(ジョン・バエズ) などアメリカの反戦フォークソングに傾倒していった。

出版界では全集がブームになっていた。『カラー版世界文学全集』(河出書房新社)、『世界文学全集』(筑摩書房)、『世界の名著』(中央公論社)、『現代日本文学館』(文藝春秋)、『日本文学全集』(集英社) などである。

ファッションでは「クレージュ」「タートル・ルック」「カルダン紳士服」「ビッド・トーン」「ミニスカート」「ミリタリー・ルック」などが流行した。

二

一九六七年

・ CM キャッチコピー 音速出張 / 大きいことはいいこと

だ／1部屋2あかり3コンセント／今夜はあつたかいシチユーです／Play Now! Pay Later!／MG5／どれくらい短くしますかー伊勢丹は2センチです／ヒザの上にもゆるミニタイプですが

・テレビ番組 旅路／みだれ髪／放浪記／これが青春だ／あいつとわたし／意地悪ばあさん／光速エスパー／怪物ブースカ／「青春の条件／太陽のあいつ／トップジョージョ／お昼のゴールデンショー／マグマ大使／スパイ大作戦／結婚志願／風流寄席／忍者ハットリくん／インペーダー

・流行語 戦無派／昭和元禄／核家族／マイカー族／フリーテン／ヒッピー／マクルーハン／ガバチョ／ポイン／バハイ／ケロヨン。

・ベストセラー 華岡青洲の妻／まぼろしの邪馬台国／徳川の夫人たち

・歌謡曲 ブルーシャトー／世界は二人のために／小指の思い出／夜霧よ今夜も有難う／君こそわが命／新宿ブルース／知りたくないの／小樽のひとよ／帰ってきたヨッパライ

・映画 風と共に去りぬ／夕陽のガンマン／おしゃれ泥棒／日本のいちばん長い日／伊豆の踊り子

歌謡界では引き続きグループサウンズがブームだった。

タイガース、テンプターズ、カーナビーツ、オックス、ヴァレッジ・シンガーズといった第二陣のグループがデビューした。テレビ番組「大学対抗バンド合戦」が人気を集めたのは、このころではなかったろうか。それを見ながら「福助企業対抗芸能合戦」というのを思い出した記憶がある。

サラリーマン向け漫画雑誌が創刊されたのもこの年だった。「漫画アクション」「ヤングコミック」がそれである。少年漫画雑誌には「天才バカボン」「柔道一直線」「夕やけ番長」「田舎つぺ大将」「もーれつア太郎」「無用之介」「パーマン」「ゲゲゲの鬼太郎」などが人気を集めていた。ファッションでは石津謙介の「JUN」「VAN」「モックブルック」「メキシカン・ルック」が流行し、ミニスカートの流行でパンティストッキングが売れに売れた。

三

一九六八年

・CMキャッチコピー ワンパクでもいい たくましく育ってほしい／ひと味ちがいます／見える見える／お正月を写そう。

・テレビ番組 明日こそ／龍馬が行く／連想ゲーム／お昼

のワイドショー／巨人の星／肝っ玉かあさん／キックボクシング／お昼のゴールデンショー／3時のあなた／アフタヌーンショー／ゲゲゲの鬼太郎／「女子プロレス／ローラーゲーム

・流行語 とめてくれるなおつかさん／ノンポリ／ゲバ棒／エンブラ／シビルミニマム／サイケ／ハレンチ／タレント候補／ズッコケ／指圧のころは母ごころ／夜明けのコーヒー

・ベストセラー 竜馬がゆく／頭の体操／どくとるマンボウ青春記

・流行歌 天使の誘惑／あなたのブルース／恋の季節／星影のワルツ／サウンド・オブ・サイレンス／花の首飾り／銀河のロマンス

・映画 卒業／猿の惑星／2001年宇宙の旅／ロミオとジュリエット／白い恋人たち／俺たちに明日はない／クレージー・メキシコ大作戦／座頭市喧嘩太鼓／黒部の太陽／緋牡丹博徒

前年に始まったサラリーマン向け漫画雑誌は出版界にブームを起こしていた。「月刊漫画グラフィック」、「月刊ビッグコミック」、「月刊ブレイクコミック」が創刊され、駅売り週刊誌の色合いが一変した。つまるところ五〇年代に「少年」

「冒険王」「マンガ王」などで育った子どもたちが、「少年マガジン」「少年サンデー」を経て、そのままマンガの第一世代として社会人になったわけだった。

ファッション界はミニスカートがピークを終え、その反動で「ミディ」「マキシ」が流行した。一方でややエキセントリックな若者たちは「サイケ」「ヒッピースタイル」、ノーマルを自認する若者は「タートル・ルック」や「カジユアル・ルック」というのが一般だった。

四

一九六九年

・CMキャッチコピー はっぱふみふみ／Oh！ モーレツ／スカットとさわやか／痛快まるかじり／違いのわかる男
・テレビ番組 信子とおばあちゃん／天と地と／「巨泉・前武ゲバゲバ90分！／コント8号！裏番組をブツ飛ばせ／8時だヨ！全員集合／T.V.ジョッキー歌の星座／水戸黄門／サインはV／七人の刑事／「オールナイトフジ／ムーミン／サザエさん／宇宙大作戦
・流行語 エコノミクシアニマル／ニヤロメ／水平思考／あつと驚くタメゴロー／やったぜベイビー／あなた好み／オヨビでない／夜明けは近い／サヨナラの総括

・ベストセラ― 天と地と／赤頭巾ちゃん気をつけて／さびしい王様

・流行歌 いいじゃないの 幸せならば／夜と朝のあいだに／夜明けのスキヤット／港町ブルース／池袋の夜／禁じられた恋／長崎は今日も雨だった／時には母のない子のよるに／グッドナイト・ベイビー／風／花嫁／人形の家／ブルーライト・ヨコハマ／白いブランコ／恋の奴隷／真夜中のギター／ひとり寝の子守唄／坊や大きくならないで／遠い世界に

・映画 ウエスト・サイド物語／荒鷲の要塞／新網走番外地・流人岬の決闘／男はつらいよ

隔週刊の漫画雑誌「ビッグコミック」でさいとうたかおの「ゴルゴ13」がスタートし、「コミック」という新しいジャンルが固まった。週刊ポストが「花の係長」の連載を始めたのは、この年の十一月だった。少年漫画では「ハレンチ学園」が少年たちの性的好奇心を煽るという理由で社会問題化し、一方では「おろち」「キツカイくん」など「怪奇モノ」が流行した。

若い女性たちの間では「アールデコ」「シースルー」「パントロン」「スイッチング・ルック」「ユニセックス」が流行り、「マキシコート」「ブーツ」が飛ぶように売れた。

東大安田講堂事件をきっかけに、反戦・反体制を訴える若者たちは街に出て行つた。アングラ劇場「天井桟敷」の主宰者で若者から圧倒的な支持を得ていた寺山修二が唱えた「書を捨てよ、町に出よう」が強い動機付けを与えた。

フォークソングは「バラが咲いた」「この広い野原いっぱい」などに代表されるホノボノ路線から、メッセージ・ソングに変化し、東京・新宿の西口広場で毎週土曜日に始まった「反戦フォーク集会」（新宿フォークゲリラ）では「自衛隊に入ろう」や「友よ」がしばしば歌われた。

ちなみに太平洋戦争における沖繩を唄つた「さとうきび畑」は六七年に発表され、六九年に森山良子が「BBS」の深夜放送「バック・イン・ミュージック」で初めて全国に紹介した。

ざわわ・ざわわ・ざわわ……で始まる静かな、七分以上もある長いメロディが終わつたとき、言い知れぬ深い思いがこみ上げたことを覚えている。

反戦フォーク集会について、のちの報道には誤りがある。唄われたのは反戦歌ばかりではなかった。

「アザミの唄」「浜千鳥」「琵琶湖就航歌」「桜貝の唄」「冬の星座」「浜辺の唄」など、歌声喫茶の定番ソングも唄われていた。それは単に音楽的嗜好の問題ではなかった。グループ・サウンドであれフォークソングであれ、多くは

商業主義の匂いがした。

歌声喫茶系の唄は、その場に参加する全員が声を合わせるところに特徴があつた。それを共同幻想であるとすれば、おそらく現今の「バザールモデル」をベースとするオープンソース・ソフトウエアも共同幻想ということになるかもしれない。だがそれこそが価値というものの本質でもあることに、多くの人が気づいていた。

「友よ」を作ったのは、岡林信康という青年である。牧師の家に生まれ、清貧であること、おのれを偽らないこと、人を傷つけないこと、常に底辺の人々とともにあることを、自身に課せられた義務と信じ、それを演じ続ける役割なのかもしれないと疑いつつ唄うことが、強い負い目ともなつた。

「ガイコツの唄」「チューリップのアップリケ」「手紙」「山谷ブルース」「わたしたちの望むものは」「今日を越えて」「それで自由になつたのかい」——彼が創り出す唄は、彼の精神のきしみだった。

反戦フォークの旗手に祭り上げられたとき、彼は唄うことを止めた。代表作「友よ」は、岡林自らが編集したレコードの最後に、まるで木霊のように、歌詞のひとつひとつが聞き取れないほどぼやけている。

~~~~~ 補注 ~~~~~

学習塾 江戸時代の寺子屋、幕末の私塾など歴史は古いが、現在いう学習塾の原点は戦後団塊世代が受験期を迎えた一九六〇年代に発生した。当初は中学校や高校の引退教師が自宅で補習教室を開いていたが、それが大学受験に失敗した受験生向けの予備校と結びついた。河合塾、駿台予備校、代々木ゼミナールといった予備校のほか、Z会に代表される通信添削型、旺文社の全国模擬試験など「受験産業」が形成された。一九八八年には通産省認可の社団法人・全国学習塾協会が設立されている。

ジョーン・バエズ Joan Baez / 1941 ~ .. ポストン大学在学中にギターで作詞作曲し自ら歌う「シンガーソング&ライター」の先駆となった。一九五九年ニューポート・フォーク・フェスティバルに真つ赤な霊樞車で乗りつけて反戦をアピールした。伸びのあるソプラノが聴衆を魅了し、たちまち「フォークの女王」となった。初期は「ドンナ・ドンナ」(ドナドナ)、「朝日のあたる家」、「風に吹かれて」といった情緒的な歌が中心だったが、ベトナム戦争が泥沼化した六〇年代、反戦のメッセージをうめた「We Shall Overcome」(ウィ・シャル・オーバー・カム・勝利を我らに)といった歌が多くなった。六七年一月に初の来日公演を行い、押しかけた聴衆に「自分は歌手であるよりもまず人間。次に平和主義者」と訴えた。

さいとうたかを 1936 ~ 2021。本名は「斉藤隆夫」。大阪・堺に生まれ家業の理髪店を手伝いながら漫画家を目指した。一九五五年『空気男爵』(日の丸文庫)でデビューし貸本向け漫画本で

生計を立てた。五九年「劇画」という言葉を創出して旧来の漫画と一線を画し、六〇年さいとうプロを起こして分業による量産体制を敷いた。ビジネスマン向けコミック誌の興隆で『無用ノ介』『ゴルゴ13』などヒット作を立て続けに出した。

寺山修司 てらやま・しゅうじ / 1935 ~ 1983。青森県に生まれ早くから俳句、短歌に才能を発揮した。一九五四年早稲田大学の学生だったとき、「短歌研究」新人賞を受けて歌壇にデビューし、六〇年代に劇作家・演出家の道に入った。六七年劇団「天井桟敷」を結成し虚構と現実との交錯を描いて反戦運動組織や三派全学連の学生らに圧倒的な支持を得た。青森訛りが抜けないことを当人は悩んだこともあったらしいが、朴訥な口調がまた魅力でもあった。

さとうきび畑 作詞・作曲・寺島尚彦。沖縄を旅した寺島が海の見えるさとうきび畑で風の中に沖縄戦犠牲者の悲鳴や怒号、砲弾の飛び交う音を聞いた。一九六七年に初演され、六九年に森山良子によりレコーディングされた。オリジナルは「ざわわ」が六十六回も繰り返され、演奏時間が十分を超える大作だったため商業主義のテレビやラジオなどで放送されることが少なかった。

日本IT書紀 128 トレンドボックス

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。